

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第188号（2022年1月）

明けましておめでとうございます。

ふるさと「風」も十五回目の正月を迎えました。本年も宜しくお願い申し上げます。（風の会一同）



白井啓治

（二六）旧暦で暮らしの計を

（2008年12月11日）

『木の葉が落ちて風がお喋りになった』

風の囁く声が凜としてきたと思ったら、周囲の木々の葉が枯れ落ちて無駄のない線になって天を突いていた。これから春の花の開く頃までの冬の雑木林に啼く、囁く、この風の声が好きだ。

夏の木々を抜けて吹く風の声も悪くはないが、ある意味賑やかで華やか過ぎる。不要な雑音が多いともいえる。しかし、それは不愉快なものではない。木々の葉を揺らしながら雑木林の全体がてんでバラバラに囁きあう噂話の大合唱のような風の声も悪くはない。

葉が枯れ落ちて、容赦のない枝だけが天を突いている雑木林をいつ頃から好きになったのだろうかと考えてみるが、よく判らない。気付いた時には、冬枯れの雑木林の、容赦のない枝の美しさが

心にしっかりと根をおろしていた。これは、高校を卒業するまで、雪のない冬を知らなかったことに起因するのかもしれない。



（絵： 兼平智恵子）

子供の頃から無意識のうちに心に刻み込んだのは、身を凍らせながらも、凜として天を貫く容赦のない冬の木々の枝は、春の訪れを疑うことなくじつと待つ希望の強さと言えた。

これは多分に個人的な内面感情であるが、雪国に暮らすというのは、常に春を待ち望むという感覚のあるのではないかと思う。秋風が吹き始めると、冬になるという感覚ではなく、次の春がやって来るんだな、という感覚が生まれる。季節と言うのは、春を迎えるためにある、そんな感覚が私の中にはある。

今、ふと思ったのであるが、四季というのは春

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32（木村）

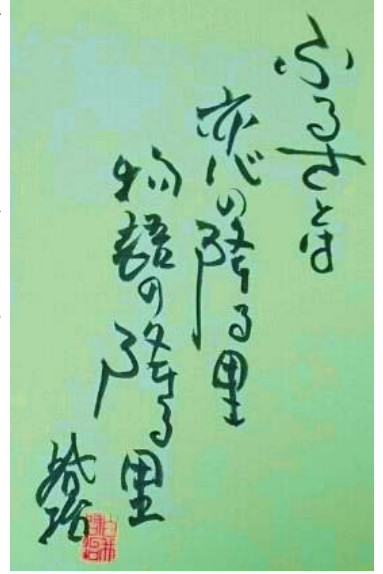
HP <http://www.furusato-kaze.com/>

夏秋冬と言うのだから、春が起点となっているのだろうか。だとすれば何故春を一月としなかったであろうか。寒風吹きさらす冬に一月を持つてこないで、三月の半ば過ぎを一月とすればよかったのと思うのだが、暦は暦で独立している。しかし、待てよ。旧暦の暦を使うと、一月は、梅も咲き始めようという頃で、新春と言うには理にならなっている。そうだ、来年からは旧暦に従って暮らしの計を立てるのが良いのではないだろうか。よく考えてみると、百姓暮らしの計は旧暦になっっているではないか。

これは、ちよつと真剣に旧暦の復活運動を起こしてみても悪くはないだろう。

（本稿は故白井啓治氏の常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘って掲載されたエッセイを載せています。）

【故白井啓治氏が11年前（2011年）に毎日書いていたブログの中から一部を抜粋します。】



始まりがあつて終わりがやつてくる

（2011年1月1日 白井啓治（故）

『今日からはまた新しい年と歳のはじまる』

新しい年が無事に始まるということは大層に嬉しいことであるが、一方に新しい歳も始まることになり、これは一歩人生の死暮れに一歩近づくことでもある。新年早々縁起でもないとお怒りになる方もおられるやもしれぬ。しかし、これはこの世の実相である。これを知らずして、解からずして何事も始められるものではない。人生という生と行動の基本である。些かへそ曲りで禅問答のようになってしまうが、人の生の活動とは、その終末を知ることによって今を希望豊かに過ごすことができるといえる。人間の生きるといふ命が有限である以上、その終末を想うことによって、無限大の夢と希望を描くことができ、確かな今日の歩みができる。そして、確かな今日の歩みには、卑猥な姑息もエゴも存在しなくなる。

そんなことを考えながら、最も希望的な、元日にふさわしい一行の文が浮かんできた。

『来年があるさと元日の言ふ』

百日紅今年も真紅の花ひらけ

（2011年1月4日）白井啓治（故）

今朝、10時頃、お猫様のブラッシングをしながら、時々やつてくる野良猫の「てんてん」のためにスチロールの箱で雨露のしのげる小部屋を作って置いてあるのだが、その小部屋に野良殿がまだ寝ているのを見ていた。しかし、ブラッシングを終えても全く動く気配もなく寝ているので、おかしいなと近づいたところ、死んでいた。二、三日前随分弱っているなと思ったのであるが、やはり寿命が尽きたのであった。

我がお猫様が唯一庭にやつてきても怒らなかった猫である。鼻の頭に小さく点がついたように黒くなっていたので「てんてん」と呼んでいたのであった。子猫の時から来ていたので、二歳半の年齢であることは知っている。夭折といえは夭折なのである。

小生は、野良猫に餌をやることは決してしない。動物愛護ぶつて餌だけやる人が大勢いるが、餌を与えればまた野良猫が増えるのである。人の身勝手、無責任な増繁殖である。野良猫を可哀そうだと餌をやるのであれば、きちんと飼ってやらなければならぬのだ。

我が家のお猫様も、野良ではなかったであろうが迷い込んできた猫である。愛犬が死んで一か月後のことだったので、何かの縁と家族にしたのである。家族としたのだから、きちんと避妊手術をし、ワクチンを打ち、毎日ブラッシングをしてやる。また月に一度はシャンプーをしてやる。

野良猫を可哀そうと餌だけを与える者は最低の偽善な奴だと小生は思っている。

昨年春に、庭に野良猫が死んでいた。それで百日

紅の木の根元に埋めてやったら、真つ赤な百日紅の花が咲いた。それまではピンクに近い色であったのだが、真つ赤な花になったのである。それで「てんてん」をまた百日紅の根元に埋めてやった。今年もまた真つ赤な百日紅の花が咲くだろうと思っている。

野良猫、野良犬が可哀そうだと思うのであれば、決して餌を与えてはいけない。餌を与えるのであれば、責任を持って家で飼ってやることである。人の勝手に家猫、家犬にさせられ、人の社会の中でしか暮らせなくしてしまったのは人間なのだから、餌だけ与えれば餓死しないだろうなんて考える奴は許せぬ悪党だ。人に飼われない限り彼らには幸せの生はないのだから、餓死するのならはそのほうが自然で、彼らは自然の幸せに帰ることができるのだ。

新成人達よかつて新人類と呼ばれた新成人が居たことを知っているかい

2011年1月10日 白井啓治（故）

今日は成人の日。新成人について、物知り顔の旧（かつての）成人たちがいろいろと物申している。だが、そんな声に耳を貸してはいけない。旧人達に耳を貸していたら、新しいことが生まれなくなる。進歩がなくなるといふことだ。

…と、こんな判り切ったことをしたり顔で言ってみる小生もろくな者じゃないな。

世代交代というのはおよそ20～25年ぐらいの



間隔で巡っているようである。そう思っ振り返
つてみると、25年ほど前に、新人類のタイトル
で「新人類をいかに社会に軟着陸させるか」とい
ったテーマの教育映画の脚本を書かされたことが
あった。もしかすると、その新人類と呼ばれた世
代の子供達が今の新成人なのかもしれない。そう
いう意味では、今大きく世代が交代し始めている
のかもしれない。今年の成人たちは、バブルな経
済を全く知らない世代である。新人類の時は、バ
ブルの絶頂期に売り手市場の中の就職で、就活な
んて言葉はなかった。

小生の就職時は昭和の40年ごろであるから、高
度成長まっしぐらであったと思う。

デフレ世代の子供たちが成人するころはどんな時
代になっているのだろうか。小生あわよくばそ
れを見ることができるかもしれないが、見るこ
とができたら実に愉快なことであろうと思う。

今日、何気なくテレビをつけたら、とてもいい言
葉を耳にした。もう番組が最後のほうだったの
で中身のことはよくわからないが、こういう言葉で
あった。ある企業の経営責任者の話であったと思
うが、「当社はみんなが賛成する経営企画案は時代
遅れと考えている」というようなことを言ってい
た。不況と言われている中で伸びている会社はや
はり違うなと思った。

小生達の脚本や文芸などの世界では、新人賞とい
うのは既成を打ち破る強さが問われる。いわば型
破りが必要なのである。世代の交代というのは、
いわば既成の破壊、型破りによって始まるのだ。
コンセンサスなんて糞喰らえの精神で、新しい世
代を作り上げていってほしいものである。その前
に、この小生ももう一破りを頑張らなくては。

二〇二二年 年の初めに 兼平智恵子
謹んで新年の
お慶びを申し上げます。



日の出 旧岩間町 愛宕山にて

皆様におかれましてはお元気に新しい年をお迎
えの事と存じます。

昨年中はふるさと風へのご愛読とたくさんのご意
見やご助言を頂きまして有難うございました。
今年もどうぞよろしくお願いいたします。

新型コロナウイルス感染症の災厄に見舞われて
二年目の昨年は国の内外でワクチンや治療法の研
究・開発など克服に向けて医療従事者の皆様をは
じめとして、政治・経済界、そして国民皆さんの
努力によって、海外では感染者が増加している中、
日本では感染者や重症者の数が減少したと言う事
は誇れることでした。最近ではまた新たな変異株

が、世界を震撼させています。

3密(密集・密接・密閉)

3守(マスク・手洗・うがい)

家族のため 地域のため 国のため 世界のた
め今年こそ私達一人ひとりが新しい生活様式を再
認識しオミクロンと言う見えない魔物を抹殺した
い。

令和四年 寅年、邪気を払う強い霊力を持ち、
風を支配する霊獣とされている虎に、思いを込め
て、一行文。

○ としのはじめに

コロナ 一喝

一陽

らい復

智恵子

寅は干支では三番目にあたる年で方角にすると
東北東を表している。美しく気品に溢れ、しなや
かで力強い動きが印象的なトラは古くから人々の
畏怖の対象となっていました。

ここで寅年生まれの特徴を覗いて見ましよう。

○勇敢で正義感が強い 何事にも恐れず立ち向か
い必ず打ち勝つと言う勇氣持っている。

○強い信念を持つ 〓こうと決めたら梃子でも動か
ず決めたことを最後までやり通そうとする性格。

○情熱的でロマンチスト 〓心の中には常に激しい
感情が溢れて、興味のあることにはとことんの
めり込む。

○単独行動を好む 〓個性が強い 〓ため集団に合わせ
る事苦手という側面がある。

○ムードメーカー―サービスピ精神旺盛で人を笑わせるのが好きな性格皆の気分を盛り上げるのが得意。

○チャレンジ精神―興味を持った事には積極的にトライし少し位失敗してもめげない強さをもっている。

○完璧主義―いつも完璧でないと気が済まないという一面がある。その一方本人に大きなプレッシャーをかけてしまうことがある。

○冷静さに欠ける部分―感情の赴くままに行動してしまい後先、考えないという特徴がある。

○ビクマウスな面も―時には過度な大口を叩いてしまう特徴もあり、自分から非を認めることが出来ず余計な苦勞を背負い込んでしまう傾向がある。

○一人で思い悩むことも―実際は繊細で傷付きやすい一面を持っている。

如何でしょうか寅年の方を理解しうまく付きあう方法でした。

三〇六mの愛宕山頂には日本三大火防神社の―社とされる愛宕神社が鎮座しています。

大同元年（八〇六）に徳一法師により開山創建されたと伝えられている。毎年十二月に行われる悪態祭りは「日本三大奇祭」の一つといわれ、十三人が天狗に扮し無言で祠に供物を奉りながら山頂をめざす。この時悪態を言い合い天狗に邪魔されながら供物を奪った人は幸せになれると云う。

関東随一の眺望といわれ県立自然公園に指定されている愛宕山は天狗の森としても親しまれ、四季の美しさと共に、ハイキングコースとしても広く愛されています。

智恵子

海外旅行の思い出（9） 木下明男

2 度目のイタリアツアー（2）

4 日目、予定通りモデナから一路ベネチアに向けて出発。途中ボローニヤで、レジスタンスの碑を表敬訪問、凡そ3 時間でベネチアに到着。水上タクシーにて運河を渡り、細い路地を通り抜けてホテル着。夕方（6 時）までの自由行動で、レアルト橋やホテル周辺を散策後、S 氏夫人のカルメンさんと合う。食事後日本に招聘予定「ベネチアピッコロアンサンブル」との打ち合わせ後、練習場（教会のドーム下）で演奏を鑑賞、ドーム下なので音の反響が素晴らしく感動的だった。その後、アンサンブル関係者と来日日程や旅費とギヤラについて交渉。打ち合わせ後5 日目の行動を確認（全日自由行動）後解散、時間は翌日になっていた。解散後、現地で通訳と世話役のG 氏と懇談、私たちにアーテルを紹介したP 氏が辞表を提出した件やアーテルの諸事情について（P 氏とB 氏の話し合い纏まらなかった）辞表は責任者が辞表を握りつぶした等々の諸事情を聞く。

5 日目、自由行動なので東京組（3 人）は、G 氏の案内で観光地以外のベネチアを案内して貰う。ベネチアで開催された宮殿に向かい乍ら、奥へ奥へと進む（先に造船場がある）途中で、道路を挟んで向かい合う建物（2 階）から、滑車でロープが張られ洗濯物が旗のように干されている景色（フラッグと呼ぶ）更に奥に進み、バルの様な所でビールを飲みドン詰まりの教会を除く。普段見ることがない街をブラツキ、違ったベネチアを満喫。G 氏とも別れ、横浜組（2 人）と合流し、

ゴンドラに乗船。運河から、船頭のガイドでマルコポーロ・ゲート・モーツアルト等所縁の建物を眺める。劇場の裏側を通りサンモイズ地区を廻ると其処が終点だった。途中船頭に歌うことをリクエスト、素晴らしい歌声だった。集合まで時間があるので、サンマルコ広場で買い物をする。夕食前に、数人の関係者と打ち合わせ後、ベネチアのレストランで食事。

6 日目、朝9 時過ぎベネチアを発ちトリエステ（ユーゴとの国境の街）へ、午後2 時過ぎホテルに到着。荷物を置いて早速国境に向けて出発。陸路で国境を超すのは初めて、大変珍しいことである。此の頃は、東欧はまだ崩壊しておらず「ユーゴスラビア」と言うイタリアとの国境を持つ国です。車に乗ったまま、パスポートを提出し入国手続きをして入国した。海岸線の街で食事をするが、ユーゴスラビアはスラブ人が多く、スリムで綺麗な人が多かった。レストランの代金もイタリアの半分以下で、余りの安さに吃驚！小一時間ほど海岸線を散歩し、ヌーデリスト浜も眺めた。（全くのヌードは一人だったが？）トリエステのホテルで食事をしたが、ユーゴの3 倍の料金を取られたが、大変美味しい食事だった。（海の街でもあるので、海鮮が主のメニュー）

7 日目、このツアーも最終盤になってきた。早朝出発でフイレンツェに向けて出発。出発直前に東京に連絡、世界ニュースとして、米国の第7 艦隊がベイルートを爆撃したとか？また、帰り乗機予定のサベナ航空が長期ストに入った、大変心配な事である。ベネチア・フェラータを抜けボローニヤ峠を越えてフイレンツェに入った。そのまま、ウィッツィホ美術館を鑑賞。その後アカデミアに

行ったが終了して入場できなかった。3時までのフリータイムに、ベッキイオ橋とドウモを見学しホテルに戻る。大阪M氏の司会でラウラデ・フスコ（招聘予定のピアニスト）との会談。大変美人で気さくな人だった。会談後共に食事をして別れる。この時、代表団のS氏やN氏から、其々地域を代表してきているのだから、全員が折衝できる配慮を求められ、今後気を付けることにする。その後、九州のN氏とA氏と3人で、夜のフィレンツェを散策（街はドウモを中心として放射状になっている）。迷子になり、3時間ほど放浪・・・此の頃は、イタリアでは殆ど英語が通じない？ホテルでも英語を話さなかった？堂々巡りの3時間を楽しんだが、ホテルを見つけたときは、正直ホッとした。

8日目最終日、早朝にフィレンツェを発ち北部のブレッシャー市に向かう。快調に走り続けるバスの中で、一週間の疲れがウトウトしていると、誰かが走行距離を計算・・・実に1600キロも走った。すると案内のG氏から、2000キロ走ったと訂正される。《全国労音イタリア訪問団2000キロの旅》珍道中だった。この8日間、メンバーは皆食欲に好奇心を発揮、諸々を吸収した。途中ガルダ湖（ムッソリーニが生まれた街でドイツの金持ちが別荘を建てている）に寄る。城があり綺麗な街、出店で食べたメロンが美味しかった。ブレッシャー在住の日本人ピアニストS氏宅で日本食をご馳走になる。行きつけの店で買い物、ブランドではないが質の良い商品が安い。ここで、皮コート・バッグ・財布・バンドを購入。49万リラが34万リラにディスカウント。買い物に夢中になり、ミラノでの買い物時間が無くなった。そし

て、最期の晚餐は中華料理、安かったが美味しい店だった。東京代表団S氏とオールドパーを一本明け、朝まで交流。翌早朝マイクロバスで空港に向かい機上の人となる。

離陸した機からは、頂に白い雪を被った山々が遠くに見え始める。山の手前には、平らに敷き詰められた真綿の様な雲海が・・・！やがて、聳え立つ山々が真下に迫り、手を伸ばせば届くような迫力。暫くの間、見とれて声も出ない。機内放送から、モンブランやシャモニーの名前が？言葉は判らないが、多分機がそれ等の上を飛んでいるとガイドしているのだろうか？やがて、機は左右に傾かせ機内の人にアルプスの山々を見せてくれている。海と間違えるような大きな湖の上空を飛行。

機はブラッセルを経てアンカレッジに到着、一時間の給油点検後飛び立った機は、アラスカの大地を眼下に飛んでいる。連なる山、氷河、蛇のように曲がりくねった河、そして真っ白に広がる原野、アラスカの自然を堪能しながら日本へ！



地域に眠る埋もれた歴史（76）

木村 進

新年明けましておめでとうございます。本年も昨年からの続きで「常陸国における親鸞の足跡」の続きを載せます。よろしくお願いいたします。

【常陸国における親鸞の足跡】（2）

大山草庵跡

石岡からまっすぐ北上して旧桂村にある桂中学校のすぐ脇の「阿波山上神社」脇に親鸞の大山草庵跡という碑が置かれている。



正面に鳥居は「阿波山上神社」のもの。この神社もとても気になる場所です。

阿波山はこのあたりの地名にも使われているが、「粟」という地名もあり、水戸に注ぐ大きな那珂川が近くを流れます。そして、常陸国風土記には那珂川は「粟川」と表記されています。この阿波山上神社の御神木は「スクナヒコナ」神が降臨したとされて、特異な神社です。

右手に桂中学校があり、その手前の道を入ったところが大山草庵跡です。



《大山草庵の由来 ―開宗宣言の地―》

浄土真宗の開祖、親鸞聖人は、建保二年(1214)越後の国から常陸に入り、建保四年(1216)には、この大山の地に歩を運ばれ、ここを常陸奥郡の布教伝道の中心地とされました。当時、大山には聖人の師・法然の弟子であった行観上人が建暦二年(1212)に開山したといわれる浄土宗の阿弥陀寺がありました。親鸞は、師法然のゆかりの寺を頼って、この地にこれられ、その境内に草庵を結び、諸公達の懇願により建保四年十一月八日には、法然の三回忌法要で三尊六高祖を安置され、厳かにとり行われました。従って、これを真宗興行の法要といい、大山草庵は開宗宣言の地とも言われています。

聖人の教えを受けた人達は数多く、中でも入信房、

明法房は有名であります。その後、二代定信、三代如証、四代信善、五代信真、六代真順と続き、七代信如の明徳三年(1392)に額田城の守護寺となりました。爾来、血脈相承により、現在に至っています。

一方、浄土宗阿弥陀寺は、水戸藩主徳川斉昭公の寺院整理により天保十三年(1842)に廃寺となり、今は往時を偲ぶものとして古い墓石が散見されるだけです。(桂村史談会)

稲田から大山まで約20 km、小島まで約30 kmあります。親鸞の弟子達の興した寺は稲田草庵よりほぼ30 kmの範囲内に散らばっており、稲田が活動の中心と考えられているようですが、³か所の草庵がどのように関係していたのかなど、その詳細はほとんどわかっていません。

法然、親鸞が流罪になったのは承元元年(1207)親鸞35歳。流罪赦免はその4年後(1211年)、小島草庵を結んだのは建保2年(1214)、師・法然が死去したのは建暦2年(1212)、そして1214年に法然の三回忌法要をこの大山の阿弥陀寺で行った。そしてこの大山にも草庵を結んだ。小島を去ったのは(弟子に譲った)のは1217年?

稲田に草庵を結んだのはいつか?

はつきりしませんが小島草庵ができてそれほど経たないうちだったのではないかと思います。常陸国に来て2〜3年くらいの間に草庵は3か所でき、各地を巡り歩いて布教していたのだと思わ

れます。小島では3年間最後の3か月は出かけずにその草庵にとどまったと言われており、稲田の草庵を去り京都に移ったのは1232年頃ですがこれもはつきりしません。妻を連れて行ったかどうかなどかなり不明な事が多い。

阿弥陀寺(額田)

大山草庵跡には今は寺が残っていませんが、ここには「阿弥陀寺」がありました。

師であった法然が亡くなり、親鸞はこの大山の阿弥陀寺で法然の三回忌法要を行いました。

この阿弥陀寺が那珂市額田(ぬかだ)に移ったとの事です。しかし大山草庵跡の場所には額田に移ったことが書かれておらず、気がつかずにいました。先日、この額田の地を訪れ、阿弥陀寺を訪ねました。額田も額田王(ぬかだのおおきみ)などとも関係があるかもしれないとされるかなり歴史を持った地名です。この阿弥陀寺以外にも面白い発見がいくつかありました。

これはまた別なところで紹介していきたい。

親鸞の24人の弟子が建てたとされる二十四輩のここ阿弥陀寺は第十四番です。

参道を少し行った先に古びた山門が立っている。

山門の2階部分に鐘が置かれている。

この門の手前には大きなイチヨウの木がある。

また門をくぐった境内には立派なしだれ桜がある。

ここをただの親鸞の弟子が建てた寺だと思ったら、多分何も見えてこないかもしれない。



さて、那珂市額田の阿弥陀寺の境内に置かれた案内板の内容を見てみましょう。

大山禪坊阿弥陀寺

阿弥陀寺は浄土真宗二十四輩本蹟十四番の寺である。親鸞聖人は建保四年（一二二四年）那珂西郡の大山の地に念仏道場を開かれ、同年十一月八日に、三尊六高祖の莊嚴を安置、師法然上人の追悼法要を勧められた。その時の三尊六高祖の真筆が現存している。親鸞聖人は大山には約十年滞在され念仏弘通に精進せられた。その間に二十四輩以下四百五十余人の弟子が生まれている。やがて聖人は大山の道場を二十四輩十四番の弟子定信坊に付属され京都に帰られた。定信房往生の姿、親鸞聖人の玄孫善明上人が大山の三代目相承者となり、以来血脈相承により現在二十七代まで伝承している。

もう一方の城里町にある大山草庵跡に掲げられている説明内容を以下に示します。

大山草庵の由来

―開宗宣言の地―

浄土真宗の開祖、親鸞聖人は建保二年（一二二四）越後の地から常陸に入り、建保四年（一二二六）には、この地に歩在され、ここを常陸奥郡の布教伝道の中心地とされた。

当時、大山には、聖人の師法然の孫弟子で行観上人が建暦二年（一二二二）に開山した浄土宗の阿弥陀寺がありました。親鸞は師法然のゆかりの寺を頼って、この地にこられ、その境内に草庵を結び、諸公達の懇願により、建保四年（一二二四年）十一月八日には、法然の三回忌法要を三尊六高祖を安置され、厳かにとり行われました。従って、これを真宗興行の法要といい、大山草庵は開宗宣言の地と言われています。

聖人の教えを受けた人達は数多く、中でも入信房、明法房は有名であります。その後、二代定信、三代如証、四代信善、五代信真、六代真願と続き、七代信如の明徳三年（一二三九二）に額田城主小野崎下野守昭通の懇請によつて、額田堀の内に移り、額田城の守護寺となりました。以来血脈相承により現在に至っています。

一方、浄土宗阿弥陀寺は、水戸藩主徳川斉昭公の寺院整理により、天保十三年（一八四

二）に廃寺となり、今は往時を偲ぶものとしては古い墓石が散見されるだけであります。

（桂村史談会）

大きな椿の下におかれた案内板は日差しが強く読まづらくなっていました。

親鸞は常陸国に来たのは1222年です。最初は下妻市小島の草庵におり、笠間市稲田の稲田九郎頼重に迎えられて稲田の草庵に1232年頃まで20年近く（60歳頃まで）妻と子供とで生活しています。真宗教義の元となった「教行信証」は主にこの稲田で執筆したものと思われまます。

この稲田から北西に15 km離れた大山に別な草庵を建てたのは、この地に何かあるのではないかと考えていたのです。書かれている説明を読んで、一応の流れは理解することができました。

整理すると、親鸞の師である法然が1212年に亡くなり、その年に法然の孫弟子である行観上人が大山の地に浄土宗の阿弥陀寺を建てた。

そして、常陸国で布教活動をしていた親鸞がこの地に来てくれるように懇請し、それに応えて北部への布教の拠点としてこの1224年に阿弥陀寺境内に大山草庵を建てた。

この年（1224年）の11月8日に、この地で法然の三回忌法要を行い、親鸞直筆とされる三尊六高祖を安置した。

これによって浄土真宗が始まったといわれ、この大山の地が開宗宣言の地と言われる。

この額田の阿弥陀寺に「大山禪坊」と書かれていた板が置かれていた。

親鸞は新しい宗教を起こしたとは思っていないかったようで、あくまでも法然（浄土宗）を師と仰いでいたと言われています。

その後、大山の地に浄土宗の阿弥陀寺が存続しますが、七代目の明徳三年（1392）に額田（那珂市）の佐竹義重の子の義直がその100年ほど前に築城した額田城に入っていた小野崎氏の懇請を受け、額田城の守護寺として、現在地に移り、浄土真宗阿弥陀寺を建てたということのようです。

しかし大山にも浄土宗の阿弥陀寺は残り、1865年に水戸の徳川斉昭公の寺院整理に伴って廃寺となったようです。

なんとなく時系列的には整理できたが、親鸞がこの地を選んだのは別な意味があったのではないかという気がしてならない。もう少し調べたいが謎の多い親鸞であるのでこれは無理なように思う。

額田の阿弥陀寺には立派なしだれ桜の木がある。

ひたち小川文化“第二号”より 伊東弓子

今回は池上和子先生が大切にしてきた“文書から歴史を知る”という信念を大切にしていらしたことから紹介します。小川のI先生が「池上先生の素晴らしい論文を見つけました。読んでいて感動し素晴らしい先生だったことを再確認しました」と、話して下さったのは昨年の夏でした。

秋になって、小川文化研究会の会長さんから冊子が届きました。

調査報告 下吉影押久保家文書（第一集）

西宝珠花村一件留帳

天保十一年十一月六日（西暦換算一八四〇年十一月二十九日）

秋のお彼岸に和子先生は亡くなられ、もう百日も過ぎました。春の彼岸には“しのぶ会”をもとうと思っています。大きな力を頂いた私たち志しは引きついでいこうと、改めて心に誓っています。今回、先生の調査からまとめられた“水戸御船頭けんか始末記を二回（一月号、二月号）に分けてご紹介したいと思います。

水戸殿御船頭けんか始末記

―天保十一年西宝珠花村一件―

池上 和子

はじめに

近世村方文書を読むことに興味を持ち始めた頃、「高崎村御用留」十数冊に出会った。現在玉里村大字高崎となっているが、自分の住んでいる所のものでもあり、充分読みこなせないながらも、内容の面白さにひかれ、ひまがあれば古びた帳面をめくっていた。この御用留中、秋から冬にかけては、高崎村近隣の米を積合せ高瀬船一艘六百俵前後にして、江戸小梅屋敷へ出帆の記事が目をついた。こんな所から江戸まで船で運ぶ、しかも毎年四艘から六艘位でいくという事実にはまず驚いた。高崎河岸とは何だろうか。それが江戸時代の水運に興味をもった最初であった。そこから出発して、

川船の事、船頭の事、河岸問屋等の問題など少し

ずつわかってくるにつけ、広い視野から近隣の文書を読まなければとてもだめだと思うようになった。それは第一には、玉里村の河岸関係の文書は散失してしまつて、御用留の中の記事とあつたものの断片的な書付や証文類しかない事と、水上輸送を考へる場合、狭い地域の問題である筈がないという事からである。

高浜河岸（石岡市高浜）の河岸問屋であつた篠目（ささめ）家文書をみせていただき、ますますその感を深くした。同家の文書には江戸時代中期以後の高浜河岸ばかりでなく、断片的であるが、隣の高崎河岸、対岸の石川河岸、更には小川運送方役所も登場してくるからである。

水戸藩の水運については、『水戸市史』中巻（一）（二）に詳しい。それでも水戸藩南領霞ヶ浦沿岸の河岸や小川運送方役所については、史料制約があつてか具体的な事はわからない。

昭和五十五年春、町史編纂中の小川町教育委員会を訪ねた。そこで出会ったのが、水戸藩船頭菅田家文書であつた。代々水戸藩の船頭として、実際に高瀬船を繰り、又船頭組役として船頭衆をとりしきる立場にあつた菅田家の文書類は、水戸藩の水運、川船政策を知る上で絶好の史料である。小川町史にとって、貴重な史料を見せていただいた事を深く感謝している。

水戸家の船頭に関しては、和田勉氏から下吉影の押久保家文書を教えていただいた。押久保家には三冊の帳簿が現存している。かつては文書類も色々あつたそうだが、処分されてしまい、現存の三冊は仏壇の抽出にしまいこまれてあつたのだという。

三冊とも押久保惣衛門によって書かれたもので

ある。その内の一冊「西宝珠花村一件留帳」(和紙五十六枚袋綴の堅帳だが、表紙が無くなっている)ので仮にこの帳面をこう呼ぶ)をもとに、「西宝珠花村一件」を紹介してみたい。

(一) 水戸御船頭

「西宝珠花村一件」に入る前に、その当時の水戸藩の水運と水戸御船頭について、簡単にふれておこう。

江戸の町は、幕府がおかれ全国の諸藩邸が並び町人職人が住む、一大政治都市であり、且つ一大消費都市であった。この江戸へ物資が集積されるのは当然の事で、東北・関東地方の年貢米をはじめ諸商品が送り込まれた。これら大量の物資を運ぶには、船が大きな役割を果たした。川船は底が平たく細長い構造になっており、小流・中流では茶船・ベカ船が使われ、大量に遠隔地へ輸送するには高瀬船が利用された。

諸藩は、年貢の江戸廻米が自藩の財政につながる重要な課題であるので、輸送路の確保につとめた。

とくに水戸藩では、涸沼の西岸海老沢に津役所を、霞ヶ浦にそそぐ園部川河口に近い小川に運送方役所をおき、年貢米を始め江戸藩邸に必要な日用物資の輸送を担当させた。又、海老沢津役所・小川運送方役所は、水戸領内を通過する他藩の物資から津役金を徴収する目的も合わせて持っていた。

小川運送方役所は元和年中に設置されたが、享和三年(一八〇三)には潮来領上戸に、天保三年(一八三二)には下吉影に移転した。水戸方面からの輸送には、海老沢―小川にくらべ海老沢―下吉影の方が半分の駄送距離ですむので下吉影河岸

経由が多くなり、それによって役所も移転したのである。

運送方役所には、運送奉行のもとに手代衆、船頭衆、仲間等がいて、藩の物資江戸廻漕実務を受持った。船頭は下級ではあったが、れっきとした水戸藩士で、小川音船頭あるいは水戸御船頭と呼ばれた。十人前後いたようである。小川御船頭は、小川に運送方役所があった期間が約百八十年と長い事から、役所が他へ移転したのちも、小川御船頭の呼称が残ったものと思われる。

船頭は藩の高瀬船(手船とよぶ)を一艘ずつあてがわれ、定雇水主(かこ・雇水主(かこ三・四人と共に乗りこみ、役所より指示された米穀類その他の物資を積んで江戸上下(往復)する。

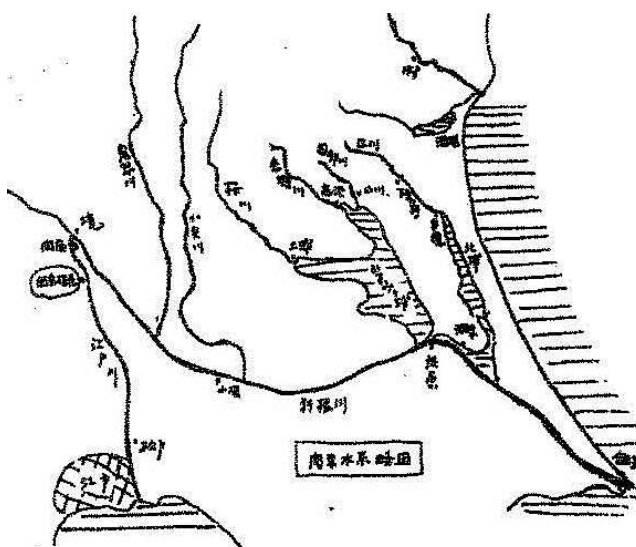
江戸時代にあつては、水戸藩は尾張・紀伊とならぶご三家で特別な地位におかれていたが、その権威は水上にも及んでいた。幕府は江戸および関東の諸大名旗本衆の手船、一般船とも川船は川船奉行の統制下におき、船に極印を打ち船年貢を納めさせたのに対し、御三家と甲府の船は例外としていた。水戸領内の船はすべて丸水の極印が打たれ、船年貢を水戸藩へ納めた。

水戸藩手船は丸水印の船印を立て、船頭は大小帯刀、えりに丸水の紋入りの御用羽織を着用し、月代は三日剃にし見苦しくないようにしていた。一方、領内の商船は丸小舟とか小んじよ字船とか総称して呼ばれた。そして川筋にあつては小の字船の船頭水主衆は、手船の船頭の保護取締をうけていた。

手船の船頭が江戸上下する実際の様子は、菅田家文書の中の「川条風雨泊り日記」(嘉永六年)に詳しい。江戸上下の乗船日誌であるが、下吉影河岸

岸での荷物積立の日からつけ始め、毎日の天候・風向、どこに泊ったか、舁下・水尺等、克明に記録している。

水路についてみると、下吉影河岸から巴川―串挽高瀬船へ荷物積替―北浦―横利根川―利根川遡上―関宿番所―江戸川下り―中川―隅田川―水戸小梅屋敷と関東平野の水系をつないでいる。以上かかっている。



上下日数は順調にいつて二十日位である。しかし、水量が少なく浅瀬が多くなると舁(はしけ)下に積替るため隙どりさらに水待日数が加わって六十日以上かかっている。

藩では長い水路の要所に船宿・穀宿・御用達を指定して、運送方役場の支所的役割を果たさせている。

船頭はこの長い道中、水戸御用船宿に寄り、途

中の川筋の様子を報告し、行先の情報をうけ、往來するのである。船頭は物資の輸送だけでなく、川筋で小の字船の難船（難波船）や、他領船との出入（けんかいザユザ）の掛合い等があれば、監督の立場から、始末をつけるのだが、証文類の作製の段になると船宿も一筆添えることになっていた。他の船は水戸手船や小の字船には一目おき、かわり合いをさける事から、手船、船頭・水主の権柄がさつの態度が増長したようで、運送方から船頭へ自重するように何度も御達が出ている。

×

下吉影の押久保惣衛門は、天保九年二月二十七日水戸御抱御船頭に仰付られ、翌二十八日には串挽において、手船を渡された。この船は三年前に新造になった高瀬船である。この船頭役任命の祝儀として、惣衛門から運送奉行をはじめ手代衆三人、中間二人、荒子一人へ酒肴を贈っている。格式は、諸士以下上下着（かみしも）上席拾石三人扶持であった。

五月九日、紺地に白抜きの丸水船印を請取った。この惣衛門が真新しい旗を手船の舳先に立て、水戸御船頭として関東の水運関係者から一目おかれつつ、江戸上下できたのは、わずか二年半でしかなかった。

というのは、天保十一年十一月西宝珠花村で手船の雇水主が刃傷沙汰をおこし、惣衛門は責任上船頭役召放押込百日という処分をうけるはめになったからである。

以下、事件発端から一件落着までをみよう。

(二) 西宝珠花村一件

1、河岸場騒動

秋から冬にかけては、船頭によっては忙しい時期である。田方の収穫順に年貢米を江戸廻漕するからである。水戸藩では、北郷の年貢は舩納が多いのに対し、南領の年貢は米納であつて、それは江戸へ送られる。この時期は手船だけでは間に合わず、領内河岸の小の字船を雇いあげ、年貢廻米に力を入れた。この事情は他藩も同じでこの川筋でも米俵を積みこんだ船が行き交い、とくに江戸への大動脈である利根川江戸川では、諸藩の手船雇船がそれぞれの藩の船印を立て上り下りしていた。

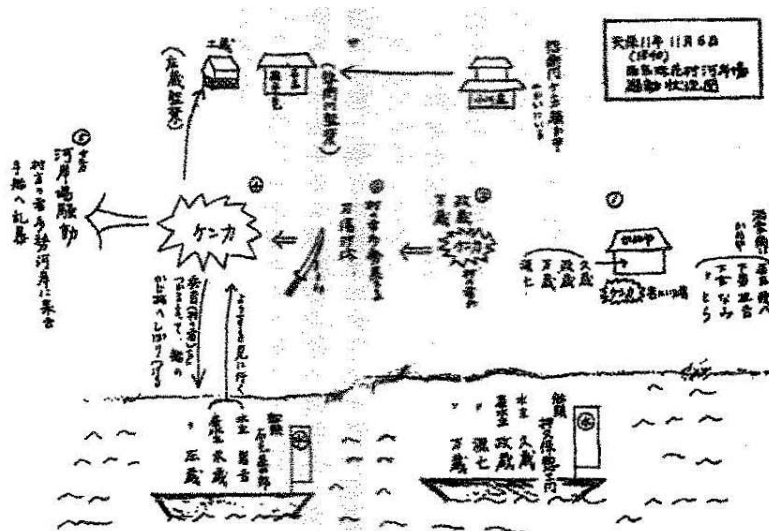
天保十一年十一月、押久保惣衛門も水戸御船頭の一人として江戸廻米にあたっていた。水戸藩下屋敷の小梅御蔵への米納も無事済み、戻りの江戸川登船中、事件が起った。

十一月六日、朝のうちだった。岡田村を出船したものの、登り船である上に西風が烈しく吹き募り漕行不能になった。西宝珠花村河岸で船をつなぎ、風のおさまるのを待つことにした。続いて、同じく船頭石毛甚四郎乗の手船も同河岸で風除をした。

惣衛門は陸へ上がり小川屋へ出かけた。戻り船だから、船中には大した下り荷もない。冬の川風の冷たさが、残された四人の水主の足をいっぱいのみやに向かわせたのか。

① 惣衛門の留守をいい事に、四人の水主はかめやで下女を相手に酒をのみ出した。そのうち、源七と店にいた船大工との口論が始まった。かめやの下男丑吉がとめに入ったが、村の者がちよつかいを出したりしてエスカレートする。かめやの主人茂八が水主衆をなだめて引取ってもらった。

② 水主四人は手船に引揚げける途中、村の者といきあつたの、あたらないのと、わびろ、わびないの、あぐくのはてには、頭をむしったの、むしらないの、十手をふりまわしたの、ふりまわさないの、つまり、よっぱらいのケンカになった。



③ さわぎを聞きつけ、人だかりができた。何者かが木刀で打ちかかり、万蔵は頭に疵をうけた。相手が多勢になつて勝目がないとみてか、万蔵・政蔵は刀を抜いて応じているうち、女を切りつけた。飛び散った血が目に入り、その後は見境なく拔身を振り回した。

④

河岸のさわぎは甚四郎乗手船にも聞こえてきた。甚四郎は何事かちよ岩吉と米蔵に命じて様子を見に遣った。両人が行けば、村方の者は、それ水戸の水主が又来たという事になろうし、又両人も血まみれで奮戦している仲間の水主を見れば放つてもおけなかっただろう。すぐにケンカにまきこまれ、村の男の平吉を船へひっぱりこみ、かじ柄に荒縄で縛りつけてしまった。

⑤

その頃には小川屋にいた惣衛門にもさわぎが伝わり、二階からどうしたものかとながめていたところへ、惣衛門の居所を探しあてた村の者にふみこまれた。言葉巧みにのせられて大小刀を渡し、名主権平宅へ連れてゆかれ、河岸鎮め方相談どころか、番人をつけられ監禁される始末であった。

河岸では、兵吉が船にとられたというので、さらに興奮した連中が、手船に押し寄せた。水主はすぐに舳網を解いて漕ぎ出そうとしたが、甚四郎船は村の者に綱を押さえられてしまい、惣衛門船に一同乗込み逃げ出した。そのドサクサに水主庄蔵が捕えられ、名主権平方の土蔵へぶちこまれた。

冬の事として日が暮れようとしていた。河岸ではあちらこちらで篝火がたかれた。大勢の野次馬が集まった中には、揃いのあかね染の手拭をかぶって一きわ氣勢をあげている連中がいたり伴木・拍子木を打回る者やら、半鐘を鳴らす者やら、人の気持をいやが上にもたかぶらせる。奪い取った水戸手船には、逃げ出した船頭水主へのうらみつらみと共に、石や瓦を投げこみ、せいじ内の鳶（とび）口や六

尺棒を持ち出し、船印を破るといふ狼藉となつた。

川下へ逃げた船頭水主七人は、村方に残してきいた船頭惣衛門、水主庄蔵を気遣いながらも、助けに行く事もならず、とにかく江戸屋敷と下吉影の運送方役所に飛脚を立てた。

この西宝珠花村での河岸騒ぎをききつけ、夕方には木間ヶ瀬・関宿の御用船頭の者がかけつけた。又、流山から水戸船頭大山与兵衛が夜通し急行した。

（次号へ続く）



岩谷古墳

小林幸枝

天気が良かったので、石岡市青谷（八郷地区）にある岩谷古墳を見に行ってきました。

辻パーキングに車を停めて、フルーツ街道を北（フラワーパーク方面）に歩いて向かいました。パーキングから1km（約15分）くらいでしたが、思ったより遠く感じました。街道からもこんもりした古墳が見える場所で、近くに民家が2軒あります。

岩谷古墳の現状は、直径9m・高さ3mほどの大きさでした。築造されたのは7世紀中葉頃とみられ、元は大きな古墳だったようですが、その多くの盛り土は流出してしまったようです。

古墳の上には土がまだ少し残されており、雲母片岩を用いた横穴式石室（羨道部）が開口しています。

石室の全長は5・1mほどで、前室・玄室の2つの部屋に分かれた構造です。

開口部から中に入る大きさで、石室の内部には小さな石仏が壁側に多数安置されていました。説明では江戸時代の太子信仰によって奉納されたものと考えられるそうです。

この石室も先の東日本大震災の時に、側壁の1枚が倒壊してしまったため、平成29年度に復旧工事がおこなわれました。

頭部が白っぽく見える石仏が多数安置されており、これらの石仏も損傷して、修理が行われたようです。

復旧の様子は市のHPの「石岡を掘る4 古墳特集」（平成30年7月発行）に載せられています。



新たな挑戦

11

菊地孝夫

新年となりました。今年も「ふるさと風の会」をよろしく願います。

予告の通りに、一つのお話を書いてみることにいたします。

不思議の国の物語。

ここは、今でいう関東地方のとある貧しい小さな村である。

この村に近頃、可笑しなものが現れたというので評判となった。

みかけは一見タヌキのようなのだが、なんと人の言葉がわかる生き物なのだという。

お隣の下総の国の海岸あたりで、漁師に捕えられたという。

珍しい生き物だからと、見世物にしようと檻に入れられて都に送られる途中、柵を破って逃げ出して、この村に潜んだのだった。

村一番の貧しい家の娘が、空腹で道に倒れているこの生き物を見つけた。そのままにしておけば、村の者に見つかり狸汁にされかねない。

「ここは便宜上狸としておこう」

心優しい娘は狸を家に連れ帰ると、自分の食べ物を与えて、寝ずに介抱した。2, 3日するとすっかり元気になった。

これに恩を感じたのか、しばしば近くの川に往き、水に潜ってウナギを掴まえてきた。娘の両親はすでに亡くなっていて、祖父に育てられていた。此のおじいさんの一番の好物が鰻だったのであ

る。

よく見ると、タヌキの手は、人と同じように五本の指があった。尻尾もついてはいない。二本の足で人間のように立って歩く。毛だらけの顔で、どんぐり眼だった。狸と間違えられるのも不思議ではない。

その一方で、言葉は「○×△□？」と、うなり声のようで何を言っているのか、さっぱりわからない。

五本の指をたくみに使っては、農具などを作ったりもするのだった。鍋釜・のこわれたものも、瞬くうちにきれいに修理して、それ以前より使いやすくなった。

この評判を聞きつけて、遠くの方からわざわざ鍋・釜の修理を頼みに来る者もひきもきらなかつた。

帰りにはもちろん、相応の銭や品物をお礼に置いていった。

此のタヌキを一目見ようと、わざわざ見物に来る者もいた。

こうして、それまで食うや食わずの生活だった娘の家は、僅かの間に、此のタヌキのおかげでみるみる豊かになっていった。

病がちで、いつも寝てばかりいた娘のお爺さんも、タヌキが山からとってきた薬草を飲んで、すっかり元気になった。

何から何まで此のタヌキのおかげである。

此のタヌキの一番の好物は、山に生えているたけのこだった。

娘は、此のタヌキをたいへんかわいがって、毎晩一緒に布団で寝た。毛むくじやらの身体と見え

娘とは身振り手振りで、言葉を伝えたから、何不自由はない。

そんなある日、一家を支えるために、出稼ぎに行つてくると言つて、上州に向かつた。

此のタヌキが留守の間に、娘の原がみるみるうちに膨らんできた。

月充ちて次々に八人の子供が生まれた。いずれも毛むくじやらの男の子だった。

やがて大きくなると、武勇に優れたこの八人の兄弟たちは、八剣士としてこの一帯に名をあげていった。

文字が読める者の少なかつたこのころ、此のタヌキは、難しい漢籍もすらすらとなんなく読めてしまった。

お経が読めるということ、お寺のお坊さんに拾われて寺男として働くようになった。

これがのちに、高崎の茂林寺の「ぶんぶく茶釜」のお話となったのである。

また、江戸の戯作者、滝沢馬琴による「南総里見八犬伝」のモデルともなった。

ここ石岡市内には、この話のように、ウナギを掴まえるタヌキの置物があつたのをご存知の方もおられよう。

不思議な文字で書かれた、解説不能の本も、各所に残っている。

阿字ヶ浦辺りには御釜のかたちをした鉄の船が流れ着いたと云う言い伝えが残っている。乗つていたものはすでに死んでいたという。

ひよつとすると、異なる星から辿りついた異星人だったのかもしれない。

風と共に 《理》

大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。
今月のテーマは、「趣向」

ここ数日は特に冷込み、風も強い状態が続きますが、皆さんの体調は大丈夫ですか？

新たなオミクロン株の発生により、未だにコロナの影に脅かされてはおりますが、徐々に新たな生活リズムに乗り始めてきています。

全ての人に当てはまるのか、そこに確たる物はありませんが、好きな事・物、嫌いな事・物があると思います。

その中に、自分自身が他よりも深く追求、或いはのめり込む世界が、もしくは違った視点を持つて、一つの環境だったり、出来事だったり、品物だったり、想像の何かに意識を持つて行かれてしまう。それが、自身の趣向ではありますが、何の因果なのか、人それぞれのスイッチは如何に入って行くのか、私自身とても興味をひかれます。

他者からすれば、そこに目をつけるの？と多いに疑問を持たれる様な事、皆さんの近くにも一人や二人いませんか？

或いは、そう言ったマイノリティは隠して生活しているかも知れませんね。

ですが、その様な人の中にこそ、偉大な発明者だったり、世に名を残す様な偉人だったり、他の人

がめをむけていないところからこそ、生み出される歴史がある事もまた事実です。

人に迷惑をかけていないのならば、自分と違うからと言って排除する様なことはしないで下さいね。お互いを認め合う事が重要ですからね。

話を戻しますが、私は割とというか至って普通な趣味・趣向だと思いますが、まずは人間観察ですね。

危機的状況・自分にとって苦痛な状況にこそ、その人の本質が行動に現れやすいのでは無いかと思います。

逆に普通の状況から幸福感を覚えたり、満足する何かを得られた時にも行動の変化がおきます。

そんな人それぞれの特有な動きには、どんな因果関係があるのか、勿論、他人の生い立ちから生きてきた環境等は知る由もありませんから、その人の年齢層・身長・スタイル・服の装い・纏うオーラ（雰囲気）等から、あくまでも私の経験と知識においての分類ではありますが、そこに当てはめてみて、その様な要因に起因していくのか、そんな事を観察しながら思考を巡らせませう。

はい、至って普通ではありませんね（笑）

人付き合いにおいては、私の趣向は少なからず役に立ちます。

これも、経験からなので上手くは説明できませんが・・・

皆さんもそれぞれが多様な趣向をお持ちかと思えます、

ここで今回のテーマへと決めた理由でもあります。が、私の知人に次の様な悩みを相談された事から、他にも同様な悩みを持った方もいるかもしれないと、そして今回私の知人はなんとか悩みの解決に至った為、どこかの誰かの役に立てるかもしれないと、テーマを決めました。

その悩みとは、成人した子供の引き篋もりです。

相談者のお子さんは学生時代に、友達との諍いにより、人間不信へと陥ってしまった結果として、家に引き篋もるようになってしまったという事でした。

色々な話をして、アルバイトを薦めてみたり、実家の農作業に連れ出してみたり、何かやりたい事は無いのか、その方も思いつく限りを試みた様ですが、中々良い方向に進展しません。

一人一人の個性がありますので、悪戯にそのチャンスを失う事は出来ません・かと言って何もせず居たら、本人にとっても家族にとっても良くない状況です。

私からのアドバイスとしては、至って単純でした。今回のテーマでもある、趣向を探してみたら良いのではないかと、今まではこちらが思うルールを導いていましたが・これからは本人主体にあらゆる角度から、本人自身も気が付いていない趣向があるのではないかと。

スマホを使って、あらゆる職業を検索しました、幸いその中に本人も興味を持ち、ある程度の条件

を満たす所で、就職を果たす事が出来たという事でした。

今回の様に上手くいくとは限りませんが、どなたにも根気よく長い目でみて本人にも家族にも無理無く、良い状況へ転じて欲しいとねがいを込めて、今月はここまでとします。

それではまた来月。

やせと暮らして (59)

なと女

いくとし、くるとし、コロナで明け暮れた2年…。新年からは落ち着きを取り戻したいものです。

・お隣さんの畑が冬の陽に照らされキラキラと輝いている……。まるでイルミネーションのよう美しい。近づいてみると其処はソラマメ畑だった。畑を囲んだ紐に、キラキラしたリボンの様なものを……。それにしても、これだけのキラキラの紐を縛るだけでも大変だったでしょう。この畑は、少し前までタバコが植えてあった。この辺りで、ただ一件のタバコ栽培農家だった。

・年末の寒い日、八郷温泉ゆりの郷での忘年会。飲み会も温泉も2年ぶり、話も弾み楽しい一時。そして、その翌日は兄弟会……。こちらも2年ぶり。久しぶりの電車で上野まで……。予定より早めに着いたので、懐かしい東京文化会館を覗き、イチョウ並木を歩き、公園内で行われていたベトナムフェスティバルを覗き、不忍池を散策しながら会場の東天紅に着いた。兄弟つれあいを含め、人皆元気でよかった。こうして今年も残り少なくな

ります。貴重な一日一日です。

・師走に入り、忘年会シーズンが……。仲間内での早々とした忘年会。みんな老年なので会は昼の開催、しし鍋や冬野菜、海鮮等……。そして、カラオケで楽しんだ。

・いつもの散歩道、雑木林の中の落ち葉をサクサク踏みしめながら歩く、もう少し紅葉楽しめそう。軽井沢にでも行ったつもりで今日も足腰を鍛えている。

・蜘蛛の糸が陽に照らされてキラリ、その先には枯れ葉が……。？我が家の入り路を遮る、嵐の後に現れた太陽……。今日も良い日でありますように！！！！

・今年もいよいよ終わり、寒いさむい大晦日……。年越し蕎麦は、早めに「まんまや」で食べてきた。コロナ禍で息子の心配（居酒屋経営）などはありませんでしたが、たくさんの人と触れ合えた1年、程ほどに楽しく過ごせた。有り難い事です、来年もよろしくお願い致します。お世話になっている竹編み師匠のFBに美味しそうなニシン漬けが……。来年伺うまで残っていますか？一年お世話になりました。

・晩秋に仕込んだ柿から柿酢が出来た。まだ、とんがった味だが、だんだんまろやかな酢になるだろう。1年ぶりにやって来た息子夫婦が土産に持って帰った。其の息子たちと、三浦半島の姪から送られてきた海鮮物で新年会。久しぶりに会話が

はずみず。

・家の柿酢作りをFBで見た友人から、「私も仕込んであるのですけどもう漉しても良いですかね！？□」との質問が……。『濾すのに時間が掛かるが、美味しい酢になっていますよ』と返事を……。！

・あけましておめでとうございます。今年もよろしく願います。クラフト仲間でも今年も楽しみます。



おすすめの本

10

燕石(えんせき)

年が明けましたが、ここにきて「オミクロン株」の出現によって、第6波が始まってしまったようです。

意外にも世間の反応は、おもいのほか冷静のようです。これまでのようなパニックに近い動きは見られていません。いつのまにかコロナの流行拡大に対しては、みんなが慣れてしまったのかもしれないですね。

伝えられているところでは、その感染力の強さに対して、重症化する割合は低いと言われています。しかしながら、感染後の後遺症には十分な注

意が必要だと考えられます。また、ワクチンの効果も薄いようです。

空気感染の疑いが濃厚となつて、これまでしてきた対策を見直さなければならぬと思います。

単なるマスクだけでは、空気感染は防ぎようがありません。

ようやく収束に向かうかと思われた新型コロナウイルスの流行も、これでまた振出しに戻ってしまうようです。

このままいけば、恐れていた医療崩壊につながりかねません。

経済に対する打撃が一層心配になります。ここ二年の間に日本経済は深刻な状態に陥ってしまいました。GDPの回復は、当面望めそうにありません。年末にかけて、世界経済も下降するという予測もあります。

場当たりのな財政政策は一向にその効果が表れてはきません。

一律の現金支給が効果あると思われるのに、一度霧でした。繰り返し何度も行ってこそ、その効果は表れるのです。今日行ったからと言って、その効果がすぐに表れるものではありません。徐々に浸透していつて始めて聞いてくるのです。

経済対策に即効薬はありません。

こんな単純な理屈もどうやらわかつてはおられぬようです。

自粛を盛んに言っていますが、一個人のできることには限界があります。

クラスターの発生は、米軍基地のあるところにも多く起きています。

かつての「スペイン風邪」の大流行もアメリカ陸軍がその発端となっています。

沖縄、山口などいずれも基地の在る所です。いわゆる水際対策も、アメリカ軍には適用されていません。

今回のおすすめの本は、

新編将門地誌 赤城宗徳著

筑波書林 1986・12・15

です。

赤城氏は政治家でもありました。他にも平将門の本を執筆しています。

平将門は、叔父にあたる平国香と領地を巡って争いになります。

一時はこの関東地方一帯に、大きく勢力を広げてゆきます。しかし、都での、朝廷工作には失敗して、逆賊の汚名を着せられ、騙し討ちにあい、あえなく滅んでしまいました。

これに対する罪悪感からか、或いは、その崇りを恐れてか、各地に「将門神社」が作られ祀られています。

また、将門にまつわる多くの伝説も残されています。

足利尊氏と並んで、皇室に対する逆賊として戦前までは長い間その研究すらタブーとされる扱いでした。残された資料も、多くが失われたと思われれます。そして、「将門記」などにもみられるように、その行動については、偏った記述だけが残されたようです。

中世の日本に現れた、稀代の英雄、平将門という武将。其の後の戦の様相もがらりと一変させた、その戦いぶりのあざやかさ。

その実像に迫る研究は、まだまだこれからと言ったところでしょうか。

この石岡地方とも深いかわりのある、平将門という人物。

この本によれば、将門の戦を支えた豊富な軍資金は、岩井市周辺の広い湿地帯のあらたな開墾によつて得られたものが多かったのではないかと思います。

三冊のうち、まだすべてを読み尽くしたわけではありませんから、これからも引き続き読んで行こうと思っています。

興味は尽きません。

この会の打田昇三さんによつて「将門記」が書かれています。

こちらも一読をお勧めします。

三日には初詣に神社に行ってみました。去年より参拝客が多かったようにも思いました。締切が長かったのに、遊びほうけていて原稿が遅れてしまいました。反省しきりです。

茨城県の難読地名とその由来(19)

木村進

毛の付く地名(門毛、粗毛……)

門毛 【かどけ】 桜川市

粗毛 【ほぼけ】 行方市

奈良毛 【ならげ】 鹿嶋市

粕毛 【かすげ】 土浦市

毛有 【けあり】 取手市

「毛」の付く地名を集めてみました。

「毛(け)」というと頭に浮かぶのはやはり人間や動物の毛、髪の毛などですね。

こちらは栗毛色、三毛猫など色の表現にも使われます。でももう一つ「毛Ⅱもう」がありますね。こちらでは「不毛の土地」「二毛作」などというように食物が育つという意味にも使われますし、そのほかにも数値の単位として分(1/10)↓厘(1/100)↓毛(1/1000)というような細かな単位を示す場合などにも使われます。では茨城県の地名に使われている「毛」はどんなところからつけられているのでしょうか。

(1) 門毛【かどけ】 桜川市

この門毛の場所は茨城県と栃木県の2県にまたがる県道257号線の県境にある町です。名前の由来については、常陸国国府(現石岡市)から「毛の国」へ行くときに、毛の国の「門」にあたる場所だということと呼ばれていたといえます。

昔、栃木県は「下野国(しもつけのくに)」と呼ばれていました。しかしこの大昔は「毛の国Ⅱ毛野(けぬの)国」と呼ばれていたのです。「けぬ」は「けぬ」とも言っていた

それが2つに分かれて「上毛野(かみつけぬの)国」「下毛野(しもつけぬの)国」となりました。

それが国名を2文字にするというお達しがあり、「下野国(しもつけのくに)」「上野国(こうづけのくに)」と名称が変わり、現在の「栃木県」と「群馬県」となったのです。都に近い方が上ですので群馬県が上です。地名を2文字にせよとお達し

(713年)は女帝の「元明天皇」の時ですが、粟は「阿波」となり、泉は「和泉」などと国名も地域地名も変わったようです。この「毛」という名前はほとんど消えています。今でも「両毛線」(鉄道)などの名前に使われています。この最初に「毛野」と呼ばれたのは、どうも4世紀くらい

の古墳時代の頃からのようです。5世紀末には「下毛野」「上毛野」「那須」などと分かれ、7世紀末に「下毛野国」「上毛野国(上毛野+那須)」となり、8世紀初めの713年のお達しで「下野国」「上野国」となりました。「毛の国」と最初にこの地域が呼ばれるようになった由来は諸説あり

(イ)「毛」は食物・穀物の意で、肥沃な土地であった「御食(みけ)」が地名に変化した。

(ロ) 昔、蝦夷人たちを「毛人」と呼び、蝦夷人たちの住む地を「毛の国」と呼んだ。

(ハ) 豊城入彦命などの「紀の国」出身者がこの地を開拓し、移住をしたため「紀の国」の「きの」が転訛した。

などの説が言われています。

(2) 粗毛【ほぼけ】 行方市

普通に「粗毛」は「あらげ」「そもう」などと読むと思いますが、この地名「粗毛」は「ほぼけ」と読みます。場所は霞ヶ浦の北湖岸に沿った旧麻生町の麻生から少し潮来側に寄った場所にあります。地名の由来についてはこのあたりの地形から「崩(ほう)ける」の言葉が元になっているといわれています。近くの「麻生(あそう)」についても「麻が生い茂っていた」という説が強いようですが、こちらも「アゾ」という崖を意味する言葉が元であったとも言われます。

(3) 奈良毛【ならげ】 鹿嶋市

奈良毛(ならげ)は霞ヶ浦の「北浦」東岸にあります。平成の大合併前は大野村でした。この地にも古墳があり「奈良毛古墳群」と呼ばれています。

地名としては、南北朝時代に常陸国鹿島郡に「奈羅毛」と書かれていた記録があり(角川日本地名

大辞典)、「奈羅毛津」、「ならけの津」と呼ばれ、港(津)が発達していたと考えられます。

「奈羅」という字を調べると、「奈羅訳語氏(ならのおさし)」という古代氏族が出てきます。この「奈羅訳語氏」は朝鮮半島からやってきた秦氏の一族だといえます。

「訳語(おさ)」とは通訳のことで、奈羅訳語氏の祖と言われているのは、「己智(こち)」とい人物が百済から日本に渡ってきて、540年に日本に帰化して、奈羅訳語氏となったといえます。

遣隋使などに同行して中国に渡って、通訳などを務めたのでしょうか。

この「奈良毛」もこの一族と関係があるかもしれません。

(4) 粕毛【かすげ】 土浦市

「粕毛(かすげ)」は霞ヶ浦へ注ぐ桜川の下流の右岸にあります。現在の上高津にあるイオンモールの少し上流側です。江戸期から見える村名で、初期のうちは「信太郎(しだぐん)」でしたが、江戸後期の天保年間に「新治郡」に組み入れられました。昔は「糟毛」と書いていたようです。「粕毛」「糟毛」というのは「栗毛」「黒毛」「鹿毛」などと同じように馬の毛色を表す言葉に使われています。この粕毛の馬の毛色は「灰色に白い毛の混じったもの」です。

地名の由来は不明ですが、この色合いと関係しているのかもしれませんが。

(5) 毛有【けあり】 取手市

この「毛有(けあり)」地区は、旧藤代町にあります。「毛無」というのは結構ある名前で、「毛無山」などがあります。「角川日本地名大辞典(茨城県)」によれば、「毛有」地名の由来は

「もともとこの地は低湿地地帯で、耕作には適さない地でした。それを江戸時代前期の寛永年間に開発され、穀倉地帯になり、「不毛」↓「毛有」となった」ということです。

作物が取れない頃は「毛無原」と呼ばれ、この地を開発したときは「毛無新田」と名付けられたそうですが、不毛の意味になってしまおうというので後に、「毛有」に変更されたのです。

参考までに北海道の駅名に面白い地名がありましたので紹介します。

・大楽毛（おたのしけ）駅：アイヌ語の「オタ・ノシケ（砂浜の中央）」に由来、
・増毛（ましけ）駅：アイヌ語の「マシユキニ」「マシユケ」（カモメの多いところ）に由来。

【御留川（おとめがわ）便り】 伊東弓子



石岡地方のよもやま話

木村 進

（6）昭和の大火

石岡の街も歴史に残る大火はいくつもある。

639年の平将門の国府襲撃で多くの神社や300戸ほどの家屋や焼かれたという。

また1590年には佐竹氏などによる府中城攻略で街中も含め町中が焼けたといわれている。この時の街の再建は1597年から佐竹氏の手で行われた。江戸時代になり、1727年におきた大火は守木町から起り、中町・金丸・守横・富田・幸町・香丸・仲之内・泉町を延焼し、547軒が焼けた。戦さ以外での一番の大火となった。

江戸時代にも100軒を超える火事が数回あり、災があつたが、幕末の天狗党による焼き討ちでは160軒ほどが焼けた。

明治以降も明治3年の長法寺（若松町）の大火、明治41年の国分寺の大火などがあつたが、なんといつても昭和4年の石岡市街でおきた大火は市街の1/3が焼失するという大きな被害を出した。

被災した家屋は約2000棟、被災者役3000人と言われている。

被災した主な建物は、金力比羅神社・常磐銀行・高喜呉服店・国分館・西之宮醬油店・常光院・華園寺・石岡劇場・村上裁縫女学校・家政女学校・明愛貯蓄銀行・松の湯・商華会館などが炎上した。

1年後に今泉哲太郎・義文兄弟により「あゝ石岡

大火災」として記録にまとめられ出版された。

一部を抜粋しておこう。

「忘れんとして忘れる事の出来ぬ昭和4年3月14日！・・・朝から吹きつけた西北の風は、午後になってますます勢いを加え、石岡の空は、もうもうと巻き上がる砂塵の煙におおわれて、太陽の光も陰惨な色に曇っていた。ちようどこの日は、旧暦2月4日の初午にあたり“初午が早い年は火早い”という俗説をなす者もあつて、各町内は稲荷祭りの社にさえ灯明を点さず、商家はもちろん、工場、浴場に至るまで1年1度の今日の日に限って焚き物を禁じ、全町はほとんど因襲的に火の戒厳令がしかれた日である。・・・各戸はようやく夕飯を済ました7時30分ごろ、突然！電線を渡る風の響き？！そは何ぞ囂らん。石岡町の心臓・中町の一角にあたつて鮮血のような炎が天に向かつてほとばしり出んとは。」（あゝ石岡大火災より）

当時、中町のお店の裏手から出火したことはわかつたが、出火原因は特定されませんでした。折からの風速15mの烈風に煽られて火は瞬く間に広がって中町にあつた細谷商店（油屋）の大きなドラム缶が爆発で中天高く舞い上がり、その油で一気にもえひろがってしまったのです。消防ポンプの放水の消火では間に合いません。消防本部も周りの家屋数棟を取り壊し延焼を防ぐのがやっとでした。

結局606戸、1700棟を焼失して鎮火したのです。中町では丁子屋染物店の土蔵と神社の大鳥居のみ

が焼けずに残り、通りの前の高喜呉服店の土蔵は無残な姿となっていたとのこと。

次の地図は今の石岡中町付近の地図に火災被害のあった場所を大雑把に記載したもののだが、富田町では府中酒造とその隣りの北向観音は風向きが幸いし難をどうにかのがれたが、ここから貝地町方面に火が走ったのが見て取れます。



この火災の後に建てられたのが現在国の登録文化財に指定されている「看板建築」の建物です。しかし最近まで店の前の歩道の上にアーケード屋根が置かれていましたので壁面の看板などは見ることができず、十数年前にこのアーケードが取り除かれ、現在の街の景観が見られるようになりました。

また昭和4年は昭和天皇が志筑の上の山（御野立所）で軍事演習を見学し、その足で石岡の街の見舞いに来ています。

石岡では3月に大火で町の多くが焼けましたが今の駅前通りの人間道路はその前に申請がなされ完成したのは昭和4年の10月21日でした。昭和天皇がこの通りの完成直後に石岡に来られ、この道路は「御幸通り」と呼ばれるようになりました。街中には大火から半年後でしたので、街中にはまだ火災の爪痕が各所に残されていました。しかし、通りから見るとそこには急いで布をかぶせ焼け跡を隠したともいわれています。



【特別企画】

打田昇三の太平記（17） 巻第八・2

○持明院殿、六波羅に行幸の事

原本が合戦場面から急に外れるが前後の事情を説明しないと全体の状況が分かり難いので始めに付記して置く。

前章段の「三月十二日合戦」は元弘三年（一二三三）の出来事で、鎌倉幕府北条政権は新田義貞や足利尊氏らの活躍（幕府離れ）で五月に滅びる。その間に後醍醐天皇は逃亡生活をしていたので、現代の天皇家の系統である別な天皇（北朝・第一代の光厳天皇）が即位していた。それを考えると「大日本帝国は万世一系」などと言うのは嘘になる様な気がするのだが、誰も遠慮して指摘しない。話を表題に戻すと、持明院殿こと光厳天皇が六波羅（幕府の出先機関）に避難をするのであるが、お供の中納言・日野資名と左大弁（参議の下・従四位職）の両名が迎えに行つたけれども門が開け放しで警護の武士は見当たらず、女官一人と童子二人が天皇の傍に震えているだけであり、天皇のほうも南殿に出て来て「誰か居ないか？」と叫んでみたが返事は無い。中納言は緊急事態であるから天皇の前に進み「官軍が負けて逆賊たちが京都に侵入しています。此処にも攻めてくる恐れがありますから直ちに三種の神器を持って六波羅に避難してください！」と告げた。

天皇は三種の神器を後醍醐天皇派に取られないように抱えて避難先の六波羅へ向かったのだが、宮殿警護の武士たちは護るべき天皇を放置して先に疎開していたから、役に立たない女官だけが供を

する寂しい行列になった。

一方、六波羅の幕府出張所では「天皇が逃げて来る！」などとは聞いていなかったで慌てた。此の天皇が現代の天皇家祖先になるので悪口は言えないが：取り敢えず空いて居た部屋を仮の皇居として光厳天皇を迎えたのである。

天皇が来た事で元氣が出た幕府軍は、有りだけの兵力を揃えて七条河原に布陣し寄せて来る敵を待ち構えたのだが敵の方でも簡単には攻めて来ない。占領地域に火を掛け鬨の声を挙げて挑発するだけであつた。此の状況に幕府軍指揮官は「敵は兵力が少ならしい」と判断して隅田、高橋両武將に是を撃退するように命じた。そこで両武將は三千余騎を従えて八条口へ向かい、別動隊として河野九郎左衛門尉と陶山次郎に二千騎を預け蓮華王院へ行かせた。

陶山は河野に「：此の俚、命令されたとおり預かつた兵力で戦場に向かつて思ふ様には戦えない。そこで、二千騎は八条河原に待機させ一斉に歓声を上げさせる。その間に我々は自分の兵力で敵陣に突入したほうが有利に戦えるのではないか？」と言へば、河野も賛成し提案のとおりにした。此の歓声を聞いた敵は正直に應戦態勢で進んできたので是を敵の予期しない方向から攻めていった。当然だが激戦となり幕府軍が有利な戦いとなった。陶山らは逃げる敵を追わず、別な場所へ行ってみると、幕府重臣（隅田・高橋）の軍勢三千が二千の敵にやられている。河野が救援しようとしたが、陶山が是を制して「：此処の勝負が分からないうちに参戦しても手柄は幕府重臣に持つていかれるだけである：暫く様子を見よう」と言

つた。そこで二人は合戦に加わる振りだけして戦わずに居たらしい。

其の中に幕府軍は敵の小勢に追い立てられ退くに逃げず攻め返すことも出来ず、中には自棄になつて向かつて来る者も有りて支離滅裂の状態になつた。是を見た陶山は「作戦の失敗で味方が負けているが、放つても置けない：」と合戦の場へ飛び出し河野も是に応じ二人は日が暮れるまで戦つた。其の努力も有つて兵力の多い幕府側は次第に優勢になつてきたので、当然だが寄せ手は苦戦を強いられる。

攻撃軍の律師則祐兄弟は最初に川を渡り敵陣に攻め込んだけれども、それが急だったので味方の軍勢が付いて行け無かつた。敵を追い六条河原から六波羅の幕府本陣へ攻め込もうとして氣が付けば主従六騎しか居なかつた。更に東寺方面から攻めた味方も合戦に負けて退却したらしく周りは敵の軍勢ばかりなので慌てた。そこで陣笠に着けていた相印を捨てて待機していると、何処で情報が漏れたのか、

「：赤松の軍勢が紛れ込んでいるらしい！川を渡つて来たので馬や鎧が濡れているであろうから、其れを見つけ次第に討て！」と叫ぶ声が聞こえた。

結局、敵に紛れ込む事は出来ない。僅か六騎で二千騎が居る中へ掛け込んで縦横無尽に暴れ回つた。敵の方では、まさか六騎だけとは思わないので同士討ちなどで混乱したが何しろ数が多いから、四騎は討たれ陶山は行方不明となり則祐だけが戦場を脱して七条通りを西に下つて行つた。ところが、其れを幕府方の印具（いぐ）尾張守に

仕える八騎の部下が追い掛けて来て「：敵ながら優美にお見かけ申す。何方で有るかお名乗りください：」と、余計なことを言つてきた。八対一では負けるに決まっているので、則祐は「：名乗るほどの者では無い。只、首を取つて人に見せたまえ！：」と言ひながらも、敵が近付けば太刀を振り、敵が離れば馬を歩ませつつ数キロの道を敵と連れだつて悠然と戦場から離れた。暫く行くと西八条の寺の前に味方の信濃守が三百余騎で、馬の足を冷やしながらか走して来る兵を集めていたので、ついて来た敵も是を見ては諦めて逃げるように去つて行くしか無い。

各所で幕府軍に追われて来た赤松勢は千騎ほどに減つてしまつたが退却する訳にもいかず、則祐は其の兵力を都の東西から進めて七条辺りに布陣させ鬨の声を上げさせた。是を聞いた幕府軍勢は七千騎を六条院から繰り出して来て両軍は四時間ほど戦ひ続けたけれども決着がつかず幕府方の河野と陶山とが五百余騎で敵の後方へ回り込んだ為に赤松勢は残り僅かになつて山崎へ引き返した。

それを河野らが追いかける。赤松則祐は追い払おうとしたが劣勢なので周りに止められ鳥羽殿前から引き返した。結局、幕府方は七十三人を討ち取り二十数人を捕虜にして都へ引き揚げた。原本には「：主上（光厳天皇？）御簾を捲かせて覧あり：」とある。逃げていただけの天皇が、偉そうに捕虜を見ても何の意味も無いように思うが：幕府方は六波羅の重臣が天皇に褒められ河野は対馬守に、陶山は備中守に任官し、共に褒美に馬を貰つたので是を知つた多くの者が妬んだり嫉んだりしたらしい。世の中は、中々公平とはいかない

もので同じ様に戦っても褒美を貰えなかった者が居るのである。此の時に「敵」として集められた「首」が八七三有ったが、中には合戦に巻き込まれた市民の首を褒美欲しさに名の或る武士のものとして出した例も多かったようで「敵将・赤松入道園心」の首として持ち込まれたものが五つもあったと言う。

酷い話だが庶民の間では首の貸し借りも行われたらしく、幕府役人も赤松入道の顔を知らないから真偽の程を確かめようが無いので、適当に賞金を出すしかなかった。

○禁裏・仙洞御修法の事、付・山崎合戦の事

「禁裏」は宮中・御所を、「仙洞」は法王か上皇の居住場所を指す。其の頃、戦乱が絶えず、然も幕府軍の敗戦が続いたので、皇族たちも平和を願って御祈禱をした：と言う内容であるが、乱世の原因は天皇などの権威が地に落ちたからなので法事の効果は無い。それでも諸寺・諸社に命じて護摩を焚いたり祈禱をしたりと、無駄なことを続けたのである。特に宮中では、梶井宮という天皇に近い皇族が比叡山の寺で要職に就いていたので其の人物を宮中に呼んで怪しい御祈禱をさせ多くの庄園を寄進したけれども、諸国から次々と齎される情報は、戦乱を告げるものばかりであり儲かったのは、適当に拝んでいた祈禱師だけである。

去る三月十二日の合戦で赤松が負け、都から山崎に落ちて行くのを追撃すれば幕府方も有利になった筈だが、それを放置していたので、赤松勢は敗軍の兵を集めて大勢力になってしまった。幕府軍は其れを知らない。赤松は、中院中将貞能と言

う中級公家を將軍に取り立て、然も是を皇族並みか野菜並みか「聖護院宮」と称して山崎八幡に布陣させ、陸路・水路を塞いで西国からの侵入を止めさせた。

当然だが物流がストップしたので一般市民はもとより京都一带の商人たちは困り果て、両六波羅（幕府）も「赤松一人に洛中を悩まされては放置出来ない」と気が付いた。良く考えて見ると、是までの合戦で敵の数は其れほど多く無かったにも関わらず負けたのは、敵の噂に惑わされたからである。今度は、敵に先んじて攻撃し賊徒の首を六条河原に晒すべし：と京都近辺の幕府軍勢を掻き集めて五千余騎の軍団に仕立て、五条河原から山崎方面に向かった。

初めは是を二手に分けていたのだが久我繩手は路が狭く周りは深田なので馬の駆け引きに支障があるであろうと、八条からは一隊として桂川を渡り、河島の南経由で物集女（もずめ）、大原野の前から攻め掛けた。此の情報を聞いた赤松は三千余騎を三分し、一手には足輕（兵）のなかで弓の上手な者五百余を選抜して山の手に回し、一手には集めた野武士に騎馬兵を加えた千余の軍勢を河辺に控えさせ、更に合戦経験者八百騎を向日（むかい）明神の後方に広がる松林に伏せておいた。

攻めて来る幕府軍勢は、まさか敵が其処まで来ているとは思わずに深入りをし、合戦に備え寺戸と言う集落の民家に火を掛け向日明神の前を過ぎて行った。其処へ近くの高台に潜んでいた赤松勢の、其れも身分の低い足輕の部隊が防御用の楯を背に負い、坂を下りながら敵陣に向かって一斉に射撃を加えた。寄せ手の騎馬武者は馬首を廻らせ

て反撃しようとしたが坂道なので馬が言う事を聞かない。仕方が無いので広い場所に敵を誘き（おびき）出そうとした。

作戦としては良いのだが敵は其れに乗って来ない。結局、或る程度の犠牲を覚悟で其の場を脱出する他は無く、指揮官は「：此の場は放棄して山崎へ向かえ！」と命令した。

其れに従って幕府軍が南に向かったところ敵方の坊城左衛門尉が五十騎程で思いがけ無い方向から攻め込んで来た。

見たところ小勢なので幕府軍は此の五十余騎を取り囲んで討とうと、田中・小寺・八木・神澤などの軍勢が、それぞれ百騎、二百騎と軍勢を出してきた。

其の様子を見ていたのが狐河に控えていた五百余騎の官軍なので六波羅勢の後方を絶つ作戦で間道伝いに攻め寄せてくる動きを見せた。分散した二百、三百などは纏まった五百に勝ち目が無いのが明白であるから当然だが幕府軍は合戦になる前に遠慮して戦場を退く事にした。賢明な判断ではあるが敵は遠慮しない。戦闘が短時間だった為に犠牲者も少なく、鎧・兜に血は着いていなかったが逃げて来る途中には泥道や深田が多かったから引き揚げて来た幕府軍の武士には合戦の後とは違う汚れが目立ち、持っていた武器を無くした者も多くて、是を迎えた京都の見物人たちは「負け戦で逃げてきたにしても、是ほどに汚れた軍勢は珍らしい！」と、散々に笑われてしまったのである。

（続く）